

<全体分析>

試験時間 75 分

解答形式

記述・論述・描図・選択・マーク

分量・難易 (前年比較)

分量 (減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加)

難易 (易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

出題の特徴や昨年との変更点

昨年と比較するとやや易しくなったが、時間内の解答は厳しく、難易度は依然高いままと言える。

その他トピックス

特になし。

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	範囲	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
[1]	問形式 (記述・ 選択)	力学 (単振動)	物理	問8では、電気量を切り替える前後で、単振動の中心と振幅が変化することに注意しなければならない。	やや難
[2]	問形式・ 空所補充 (記述・ 選択)	電磁気 (ホール効果)	物理	ホール効果を扱った標準的な問題。キャリアの運動からオームの法則を確認し、キャリアの個数密度を求めさせる問題。ホール効果の結果を用いて、地磁気の向きを考えさせる応用問題が出題された。	標準
[3]	問形式・ 空所補充 (記述)	A. 熱力学 (サイクル) B. 波動 (レンズ)	物理	A. サイクルの問題である。問4は誘導に従って考えればよい。 B. レンズの問題である。前半の焦点距離の導出は計算が煩雑なので注意を要する。	A. やや易 B. 標準

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

教科書で扱われている基本事項を確実に理解し、物理的な内容を正確に理解した上で、発展的な問題演習に取り組む必要がある。

題意のとらえにくい設問では、問題文の流れを注意深く追っていくことが要求されるので、読解力を養う練習も欠かせない。